

## 大和尼寺観音寺をたずねて

NHKテレビのドキュメンタリー番組「やまと尼寺 精進日記」やその続編「やまと尼寺くいしんぼ日記」で舞台となった奈良

県桜井市の<sup>おとわさんかんのんじ</sup>音羽山観音寺を訪ねた。

この番組は山中にある尼寺でのくらしと料理とを紹介していたが、3人の尼さんたちと山里住民たちとのほのぼのとした交流、山野の恵みをふんだんに取り入れた四季折々の料理などが観る者の心を温かくしてくれた。



コロナ禍で自粛生活を強いられていた妻が、番組放映中から「一度行ってみたい」と言っていたので、2月23日車で出かけた。

桜井市街から<sup>とうのみね</sup>多武の峰めざして急勾配の道を走る。寺川(倉橋川)沿いの道路が右

岸から左岸に移った所に<sup>おりい</sup>下居のバス停があり、そのすぐ上の橋で右岸に渡り直して南音羽の集落の中の細い車道を昇っていく。

### ハイキングスタイルでゆっくりと

私達は共に80歳目前。音羽山(標高852m)への登山路がこの寺のそばを通るので、私は何回か訪れたことがある。

寺までの長い急坂を、膝に故障をかかえる妻が、果たして上れるのか、との心配もあったが、駐車場に車を置かせてもらって歩きだす。

共にハイキングシューズにリュック、両手にストック。私のリュックにはポット、食べ物、塩飴、万一の路面凍結に備えてのチェーンアイゼンなど。

↓**本堂前で** 車止めから見上げる坂道の勾配は急、設置されているやや厳めしい丁石、



思わず緊張が走るが、路傍のユーモラスな案 ↑**立派な丁(町)石** 内看板がそれを和らげてくれる。

ゆっくり、ゆっくり歩く。萌えだした若草や一株だけ花を見せるカンスゲが春の訪れを感じさせるが、杉林の中の路は冷え冷えとしている。途中で休憩をとり、50分余りかかって、山門へと続く石の階段にたどり着く。標高600m。

### かつては大寺院だった

自然石の階段を昇り、山門をくぐると正面が



本堂で、ささやかな佇まい。いかにも山間の小寺の趣だが、日本の尼寺三十六寺の第六番寺となっている。そしてかつては百の僧坊を抱える大寺院だったが、平安時代の大水害(音羽流れ)によって大方が流失し、残った奥の院がこの本堂だと言われている。

### 守り抜かれた梵鐘

山門の左側には鐘楼がある。素朴な造りの鐘楼に大きな鐘が吊り下げられている。妻が「まあ！立派な釣鐘。こんな釣鐘が戦争中に供出されずに残っていたのね」と感嘆の声を上げた。芝房治著「観音寺ものがたり」によると、戦時中この鐘にも「徴収要請」があったが、当時の住職らが「この鐘は奈良時代の名刹・天香久山香山寺の唯一の残存物で貴重なもの」と訴えて、難を逃れたという。第2次大戦で日本の梵鐘の90%が徴収・熔解されたのだから、この鐘は稀有な例なのだ。

それにしても戦争というものは人命のみならず、こうした文化文物等も破壊し尽くす“犯罪”なのだ。



### 特別天然記念物・お葉つき銀杏

寺の東側にはイチョウの巨木がある。有名な「お葉つき銀杏」で県の特別天然記念物となっている。イチョウは街路樹や公園樹としてもよく植えられているが、世界的には絶滅危惧種とされ、「生きている化石」と呼ばれている。お葉つきイチョウは葉に実が付くもので先祖のシダ植物の特徴を有し、植物の進化史上で貴重な形質とされている。全国的にも少なく、県内でも曾爾村・門僕神社や宇陀市・戒長寺など数例のみ。

### 再訪はサクラの時期に

お寺から音羽山への登山路をたどると、山の斜面一面にサクラの森が広がっている。そしてその登り口に設置されている小さな石碑(写真左)に、サクラ植樹のいきさつが書いてあり、そこに芝房治さん(故人・この村に住み、観音寺の役員総代もしていた共産党の市会議員)の功績が彫りこまれている。

次に来るときはサクラ満開の時期に桜の森展望台から二上山を遠望したいものだ。

ちなみに芝房治さん著「大和・音羽山中観音寺ものがたり」には、観音寺とこの地域の歴史がくわしく書かれている。



## 続・続・二上山に咲く花々 2 3

### レンギョウ (連翹) モクセイ科レンギョウ属

中国原産。渡来時期については諸説あるようで、その後品種改良が進んで、多くの園芸品種も含めて「レンギョウ」と呼ばれる花は少なくありません。

3月、大阪側登山口・万葉の森近くの笹藪に点々と黄金色の花を咲かせます。今年もコブシの開花よりも早く咲きだしました。連翹の名は他の植物の中国名を誤用したとの事。春の到来をいち早く知らせてくれる花。大切にしたいですね。

実などは漢方薬の原材料。

